

蛔虫迷入によりイレウスを起せる メッケル氏憩室炎の1例

京都西陣 山根外科

山 根 齊

京都大学医学部外科学教室第2講座 (指導: 青柳安誠教授)

寛 守

(原稿受付 昭和34年9月28日)

A CASE OF THE INFLAMMATION OF MECKEL'S DIVERTICULUM CAUSED BY ASCARIS WITH COMPLICATION OF STRANGULATION

by

SEI YAMANE, M. D.

From Yamane Surgical Clinic, Kyoto

MAMORU KAKEI

From the 2nd Surgical Clinic, Kyoto University School of Medicine

(Director : Prof. Dr. YASUMASA AOYAGI)

We have experienced an extremely rare case, 6-year-old boy, in which ascaris entered into Meckel's diverticulum, caused the inflammation of it and consequently strangulation was occurred. The extirpation of Meckel's diverticulum was successfully done and he was discharged 11 days after the operation.

メッケル氏憩室に蛔虫の迷入して病変を惹起した症例の報告は甚だ稀であつて、本邦文献には僅に河本、伊達氏の1例があるのみである。これは蛔虫迷入によつて憩室炎を惹起し更に絞扼性イレウスを起した症例である。又古く志波氏の報告もあるが、これは空腸仮性憩室に蛔虫の迷入したものでメ氏憩室例ではない。欧米の文献にはまことに杜撰な調査であるが1例も見当らない。我々はその1例を経験したのでここに報告する。

症 例

奥山義一、6才。男子。数日前から臍部に疼痛を訴えアスカリス症として処置されていたが漸次右下腹部に圧痛ある腫瘤を触れる様になつた。悪心嘔吐はない。体温38度前後。

既往症：特記すべきものなく、又一般状態も特記すべき変化はない。

腹部は軽度に膨満、一般に軟であるが右下腹部に長橢円形約3×6 ㎝の腫瘤を触れ圧痛がよく移動性は殆ど証明しない。体温38.5度。脈搏120、緊張良。白血球数12000。

虫垂炎性膿瘍の診断の下に入院。入院の翌日から食思不振となり、茶牛乳を摂つても嘔吐し、夕刻には腸管痙攣が現われ、蠕動音も高くなつた。肛門指診で出血は証明しない。併し腫瘤は依然圧痛がつよい。

よつて虫垂炎性膿瘍の癒着による腸狭窄との診断の下に開腹手術を行つた。腫瘤は大網膜に包まれて更に腸管並に周囲組織と線維素性に癒着し、為に腸狭窄を惹起している。癒着を剝離して行くと漸次周囲組織から遊離して来て1 ㎝の腫瘤なることが明らかとなつた。

即ちバウヒン氏弁から口側約30糎の廻腸壁に附着するメ氏憩室である。虫垂はこれと腸間膜の間にあつて炎症像を呈していない。よつて先づ虫垂切除を行つて後にメ氏憩室を切除した。この憩室は根部は細い軸となつて腸間膜附着部に近い腸壁に連り、長さ約6糎、ところが切断端から蛔虫の一端が這出すように見え來つた。憩室の遊離側の壁は相當に肥厚していた。

術後の経過は順調で入院11日で全治退院した。

考 按

胎生第4週には卵黄嚢と廻腸下部を結ぶ臍腸管を生じ、胎生第2ヵ月には胎盤循環の発達によつて閉鎖消失するものであるが、この閉鎖機転の起らない時には種々の畸形が生ずる。メ氏憩室はその廻腸側が開放性に遺残したものである。

頻度。全屍体解剖の1～2%に存在すると云われるが、柴田は日本人胎児解剖で1.3%、鈴木は1.02%と云

い、外国文献も0.78～2.3%と云つている。開腹時に発見される率はBalfourは0.15% E. Mesterは0.11%、Halbinは0.49%といった数字を挙げている。

男女の比率は一般に男子に多いとされ3:1のような比を出している人もある。

部位。Mesterは廻盲弁から口側25～100糎、Boldtは30～90糎、Kasperは20～100糎、柴田は20～40糎、鈴木は最短4.8糎最長140糎にて20～60糎のものが最も多いといつてゐるが、我々の例は廻盲弁を去る30糎であつた。

憩室の長さも4～5糎のものが最も多く、30～40糎のものもあるという報告例もあり、Mallに至つては85糎の症例を報告している。我々の例は約6糎であつた。

太さは鉛筆大から腸管大に至り、形は半球、円錐、円筒状と種々である。我々の例は円錐状をなし、根部は細くなつて腸管に移行していた(附図写真参照)。

摘出腫瘍 表面



摘出腫瘍 剖面



腸間膜との関係は、小腸遊離縁に附着するものが最多とされているが、Dolpntnerはその他腸間膜附着部、側壁と何処からでも発し得るといつている。我々の症例は腸間膜附着部に接して生じていた。中原、柳川氏等にも同様の報告例がある。

組織学的には廻腸壁と同様であるが、時には胃粘膜或は腸組織の発見される例もある。我々の症例は組織学的検索は行わなかつた。

メ氏憩室が臨床的症状を呈するのはその1/5～1/3と云われ、本邦に於けるメ氏憩室病変例の報告では、土屋氏によると238例に達するとしている。その後松本氏

等の3例、稲葉氏の1例に我々等の例を加えて小くとも241例に及ぶ様であるが臨床症状はイレウス、出血、炎症、ヘルニア内容、腫瘍及び異物である。

イレウスは最も多く、憩室の翻入による腸重積症、或いは憩室に附属する索状物又は憩室自体の癒着による腸管の絞扼、捻転等の為に招来される。本邦報告例の大多数はこのイレウスである。

出血、異所的組織即ち胃粘膜が憩室壁に存在して潰瘍を形成し出血、穿孔を起した報告がある。F. A. McParland氏等は84例のメ氏憩室例を集めて、合併症のうちで最も多かつたのは出血であつたと報告している

が、Moseによると出血は30.9%だと云っている。

炎症。虫垂炎と全く同様の症状を呈し来るもので我々の例も亦然りである。

ヘルニア内容となつて嵌頓その他の症状を呈した報告例も多い(小川、藤沢、松橋、松野、風間その他)

腫瘍。泉山、高橋は筋腫例を報告し、稲葉氏は癌腫例を報告している。

異物。針をのみこんだ小女を開腹したらメ氏憩室内に針を発見した報告例がある。志波氏は上記のように、45才の女子が空腸に仮性憩室を有し、蛔虫が迷入して憩室炎、更に癒着によつてイレウスを招来し、手術によつて全治せしめた症例を報告し、又河本氏等はメ氏憩室内に蛔虫が迷入して、イレウスを惹起し死亡した症例を報告した。我々の例も亦同じように蛔虫迷入による憩室炎、更に癒着によるイレウス症状を惹起したが、手術によつて治癒せしめえたものである。結局イレウスを招来したのであるが、その原因は等しく異物(蛔虫)によるものである。

結 語

メッケル氏憩室は腸管の先天性異常の最も普通の形であるが、臨床症状を呈して来ることは比較的稀であつて、而も蛔虫の迷入によつて臨床症状の招来されることは更に稀である。我々は6才の男子にそのような1例を経験し、手術によつて治癒せしめ得たのでここに報告した次第である。

文 献

- 1) 志波鶴一：廻腸部のメッケル氏憩室に因する穿孔性腹膜炎及び空腸仮性憩室に因する腸閉塞症の各一例に就て。東京医事新誌, 2468, 1, 大15.
- 2) 土屋文雄, 豊田泰：メッケル氏憩室膀胱瘻, 附吾国メッケル氏憩室の総括。臨外, 11, 309, 昭31.
- 3) 代田克彦：メッケル氏憩室膈瘻の1治験例。臨外, 12, 435, 昭32.
- 4) 松本功, 佐藤吉美, 黒田学：メッケル氏憩室手術例について。外科, 20, 52, 昭33.
- 5) 河本宗之, 伊藤和：蛔虫迷入せるメッケル氏憩室に依る絞扼性イレウスの1例。日外会誌, 54, 840, 昭28.
- 6) 頓宮昇：メッケル氏憩室による絞扼性イレウスの1例。日外会誌, 54, 840, 昭28.
- 7) 竹下一典：メッケル氏憩室炎2例と軸捻転症1例。日外会誌, 54, 1176, 昭28.
- 8) 手島皓一, 下村和一, 竹村央：メッケル氏憩室の1例。日外会誌, 58, 1999, 昭32.
- 9) 稲葉穰, 垣花晶彦, 晶山茂：Meckel 憩室癌の1例。日外会誌, 60, 545, 昭34.
- 10) Mason, J. A., Graham, G. S.: Ulceration of Aberrant Gastric Mucosa in Meckel's Diverticulum. Ann. Surg., 96, 893, 1932
- 11) Anavitarte, E.: Some Pathological Aspects of Meckel's Diverticula. Surg. Gyne. Obst., suppl. international abst. Surg., 90, 260, 1950
- 12) Gold, M. A., Sawyer, J. G.: Diverticula of the Gastrointestinal Tract. Ann. Inter. Med., 36, 956, 1952
- 13) Sloan, R. D., Stafford, E. S., Singewald, M. L., Sinn, C. M.: Meckel's Diverticulum. Am. J. Roent., 71, 64, 1954.
- 14) Freedman, M. A., Chance, D. P., Harris, L. E., Kirklin, J. W.: Meckel's Diverticulum in Infants and Children. Am. J. Surg., 97, 160, 1954
- 15) Pinto, V. C., Moraes, R. V.: Complications of Meckel's Diverticulum in Infants and Children. J. Inter. College Surg., 23, 407, 1955
- 16) Benson, C. D., Linkner, L. M.: The Surgical Complications of Meckel's Diverticulum in Infants and Children: An analysis of Sixty Cases. A. M. A. Arch. Surg., 73, 393, 1956
- 17) Sarni, C. F.: Meckel's Diverticulum. A Report of Sixteen Cases. J. Inter. College Surg., 28, 16, 1957
- 18) Wansbrough, R. M., Thomson, S., Leckey, R. G.: Meckel's Diverticulum: a 42-Year Review of 273 Cases at the Hospital for Sick Children, Toronto. Canadian, J. Surg., 1, 15, 1957
- 19) Mcparland, F. A., Kiesewetter, W. B.: Meckel's Diverticulum in Childhood. Surg. Gyne. Obst., 106, 11, 1958